

友人の母親が90余歳で逝去し、その葬儀に参列した。葬儀の最後に、喪主を務めた友人が、参列者に御礼の挨拶を述べたが、これが秀逸だった。

沖縄出身の友人の母親は、縁を得て西成の被差別部落に住んだ。ひどく貧しい暮らしだったそうだが、この母は律儀の人だった。困窮の果てに恩を受けた創価学会に入信し、熱心に信仰し、その信仰心は終身変わることはなかった。同じ頃、この母は、地域で起こった住宅闘争を通じて部落解放運動にも進んで参加した。その係わりも、ボクの友人など子供達へと代を継ぎ、信仰と同じように、変わることはなかった。友人は、母が大切にしていた、その「両方」の先達、恩人を幾人か列挙し、母に変わって感謝の意を述べた。その人々はボクも知るところであり、在りし日の故人達が冬空で走馬燈になった。この母は、互いに組織を重んじるが故に、時に「水と油」になることもあるこの「両方」を、若い頃は父母のように



寒空の通夜の一杯の沖縄そば

敬い、老いても二人の子供のように慈しんだ。遠く海を越えた母にとって「両方」とも、かけがえのない「縁(えにし)」だったのだろう。

ボクは、前夜の通夜の席で振る舞われた沖縄そばを思い出しながら、ボクの友人が、人の倍ほど優しく、温和なのは、この母によるものだったんだと合点した。そして、海を渡って、異郷の地で土に還った沖縄の母の生涯を想像した。その母が被差別部落にたどり着き、解放運動に参画する因縁に、ボク達が掘り起こさなければならぬ未開の世界が広がっていることを感じた。それは、海を渡るということとも無縁ではなかったのではないかと、ふと思った。

ボクは、その夜、『焼土のまち』という西成の解放運動小史を取り出して眺め読みした。この小史を編んだ頃の思い出も蘇り、心が和らいだ。いい葬儀だった。心にしみいる沖縄そばだった。

(編)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸編

気狂いピエロ

原題：crazy pete



監督：ジャン・リュック・ゴダール
脚本：ジャン・リュック・ゴダール
ジャン・エディック・ゴダール
撮影：ラウール・クタル
キャスト：ジャン・ポール・ベルモンド
アンナ・カリーナ
製作：1965年フランス作品
カラー 105min
邦題：エム・エム・エム

ペラスケス、ルノワール、ゴッホ、リキテンスタイン、ピカソ、ボードレー、チャンドラー、ジョイスほか、この映画には古今の絵画や文学、果ては漫画までがめまぐるしく借用、引用される。絵画のカラージュや主人公たちが音読する文学作品が本作とどうつながり、テーマと関係しているのか封切当初まったくわからず、自分の理解力の無さにゲンナリして映画館を出たものだった。当時ゴダールは僕らの仲間うちで、というか同世代のディレタントからは知らないとバカにされ、オレはわからんなどと正直に告白するものなら罵詈雑言（ぱりぞうごん）降りかかること必至であった。従って、自分自身でも理解不能な理論武装で粉飾しながらその場を切り抜けるわけである。革命だ、プロレタリアート独裁だなどと手前勝手に叫びながら、仲間を殺していた連中の屁理屈と差異はなかった。ゴダールの作品は常にこんな調子だから、新作のたび、いつも敗者の気分で映画館を後にしなければならなかったのである。

「気狂いピエロ」は、武器密売に関わって殺人を犯してしまった男女が、恋の逃避行

を繰り返しながら、互いの愛の感情を確かめあうために言葉のラッシュを繰り返す。しかし彼女の裏切りに男は女を殺し、男は絶望から顔に青いペンキを塗りたくり、顔面に黄と赤のダイナマイトを巻いて自爆する壮烈なラストが用意された映画である。

映画撮影当時、ゴダールはパートナーであるアンナ・カリーナ（彼女はその頃僕らのミューズであった）との別離を抱えていて、いわばフィルムノワール仕立てだが、実は監督傷心の日誌風ラブストーリーといえる映画なのだ。そんな犬も食わない痴話ばなしを、ゴダールは革命的大文学映画にデッチあげてしまった。その後の僕は、監督自身の身過ぎ世過ぎや苦勞に共振したというより、それらを作品として前衛的に昇華したゴダールの凄さを見せつけられたと感じていくようになる。

たとえば、殺人や事故シーンなどはなんの驚きもなく日常的調度品のごとくに描写され、ボニー&クライドの気まぐれ逃避行のように、彼らの道行きも稚拙なほど非現実感をあおり、アンナの観客を見据えるカメラへの目線のありえないショット、ドラマ性の不連続、感動性の欠如、そして突如現れる色彩の洪水などなど。この作品を一言でいえば、既成映画の文法をことごとく踏みはずし、ドラマの「劇的」性を無視したものだといえる。すべての想像力を観客にゆだねたという意味で、ゴダールの存在感をより一層知らしめた逸編だといえるのではないか。

本を愛する男と音楽を愛する女の対立。それは論理と情緒の対立でもある。永遠の愛を探すための道行きに、「あなたは言葉で話す。私は気持ちで答える。二人は理解しえない」と女に語らせる場面がある。犯罪をモチーフにしながら、永遠の愛を探す向こう側にはあの奇妙な自爆シーンが待っていた。ゴダールはこの映画で、男と女、本と音楽、武器と美術、都会と田園など二項対立を映像のフレーバーにして、愛の物語を完成させたかったのだろうか。

hidarimaki

